

# 5周年記念 手記集出版

## < 今を生きる 大切なひとの分まで >

2014年11月26日 遺族支え愛ネット5周年を記念し、手記集を出版致しました。



サイズ：A5

ページ数：92ページ

### 「亡くした命が宿るとき」

K・M

母が亡くなり11年が、そして父が亡くなり二年が過ぎました。両親はそれぞれ二年半ほどの闘病生活があり、その間に当人はもちろんのこと、家族である私自身も様々な葛藤や苦悩の日々が続きました。当時のことは、両親が亡くなった後から、すんなりとは思いつけなくなりました。私の心が、つらい思いを甦らせまいと記憶を封印しているのかもしれない。けれども今、辛い作業ではありますが記憶をたどり、ここに記したいと思います。それは、自分の中にこもった重い記憶も、外に放つことで徐々に軽くなっていくことを知っているから、そして私と同じ思いを抱えていらっしゃる方が、前を向いて歩いていかれるきっかけになることが出来ればと願うからです。

十一年前に母が亡くなった時、私は妊娠五か月でした。病氣や薬の副作用と闘った末に無念にも最期を迎えた母と、真っ白な状態で生まれてくる我が子……私は二つの命の間で思い悩みました。いつか命に終わりがくることが分かっているのに、

生まれてくる意味があるのか、と。けれども、母が亡くなり自暴自棄になっていたかもしれない時期を、子どもがお腹にいてくれたおかげで自分の心体を守っていられていると気付いた時に、母は時期を見定めて逝き、子どもは時期を見定めて生まれてきた、と思えるようになりました。始まる命にも終わる命にも、全てに意味がある——そう確かに感じられるようになったのです。

それでもやはり、頭の中にはずっと雨雲がかかったままでいました。おそろしくこれは、母を失った悲しさや寂しさ、あの時こうしてあげればよかったと戻らない過去への後悔。私の最期も明日やってくるであろう不安感から来たものだったでしょう。嬉しいことがあれば「母に話せば喜んでくれたらう」と思いますが、嫌なことがあれば「母だったらどんな言葉をかけてくれたらう」と思い、何があっても結局は「母がいないこと」を嘆いていたように思います。ずっと心に雲がかかったまま、慌ただしく毎日が流れていきました。

七年が過ぎた頃、ある朝洗濯物を干し終えた私は、秋晴れの青い空を見上げました。その高くまで透き通った空の青さは、今でも目の中に浮かんできます。心の底から清々しさを感じ、体の隅々にまで澄みきった空気が満たされていく——数年ぶりに味わう爽快感でした。「トンネルから抜け出たかもしれない」と思った時に初

めて、自分がそれまでずっと暗い道を歩いていたことに気付き、そして時の経過が私を癒してくれたことを感じました。それから母のことを、涙なしに懐かしむことが出来るようになっていきました。

けれどもその半年後の春、今度は父がくも膜下出血で突然倒れました。一人暮らしの自宅で発見した時には、すでに昏睡状態でした。

奇跡的にも父は一命を取りとめたものの、歩くことも意思を伝えることも難しい状態となりました。「寝たきりになってまで生きたくない」と常々言っていた父にとしては、病院のベッド上での生活は本意に違いなかったのですが、父はそれを伝える術を失っていました。私は「とにかく生きてほしい」との思いから医師より提案される父への治療の全てを承諾してきたものの、歩くことも話すことも出来なくなってもなお父を「生かしてしまっている」という罪悪感を抱えながら看病を続けました。

その頃の私は、二歳と六歳になった子ども達の育児と、父の看病に追われる毎日。心が折れそうでも、どうしても私がするしかない数々の現状を前にして、私は次第に自らの感情を抑えるようになっていきました。辛いと感じることが薄れていったものの、目からは理由の分からない涙がぼろぼろとあふれてくる日々が続きました。

二年半の入院生活の末、父は最期の時を迎えました。緩やかに消えていく命に寄り添った数時間は、ただ静かに時が流れることを願いながら、穏やかに過ぎていきました。生きていける人の体の温もりや一秒一秒の時間の長さや、あれほど尊く、そして愛おしく感じたことは私の人生の中で初めてのことでした。

父が亡くなった後は、最期まで看取ることができた安堵感を持ちつつも、多忙な日常の中でふと出来た隙間には悲しみが込み上げてくるという、不安定な心情が続きました。そんな中、両親の遺品整理を始め、両親が遺してくれた一番大切なものは何かと考えました。そしてそれが「私自身の命」だということに気付いたのです。私の中には確実に、両親の暮らしぶりや考え方が息づいています。私自身が日々を大切に生きることが、両親がこの世に生きていた証であり、思いを受け継ぐことだと思えた時、私の中に新たな二つの命が宿ったように感じました。

今でも、お正月やお盆の時期に実家へ向かう家族連れや、祖父母と手をつないで歩く子どもの姿を見ると、両親を亡くしている私の心は痛みます。けれど、その痛みはきつときの経過が和らげていくと信じています。姿はなくなっても、思いは生き続ける。悩んだ時には自分の心の中にある両親に尋ねると、不思議と答えが返ってきます。嬉しい時には、両親の笑顔が浮かんできます。「亡き人と共に生きる」とは、そんなことなのかもしれない。